

## 日本史

| 日程   | 大問  | 出題分野・テーマ           | 難易度 |
|------|-----|--------------------|-----|
| 2月7日 | I   | 原始～中世の取引、経済活動      | やや易 |
|      | II  | 12～19世紀の国際環境と対外関係  | 標準  |
|      | III | 羽仁もと子と近現代における女性の活躍 | 標準  |
| 2月8日 | I   | 原始～中世の信仰と宗教        | 標準  |
|      | II  | 中世～近世の商業活動         | 標準  |
|      | III | 近現代の日米関係           | 標準  |
| 2月9日 | I   | 古代の大伴（伴）氏          | 標準  |
|      | II  | 屏風に描かれた風俗と近世の芸能    | やや難 |
|      | III | 石炭と近現代の産業・経済       | 標準  |

## &lt;出題傾向&gt;

大問が3題、小問が38問という構成は例年通りである。空所補充、文章選択（正誤判定）、語句選択、年代整序、組合せなどといった形式の問題が出題されている。小問数が38というのは、大学入試問題として、ほぼ平均的な量と言えるだろう。ただし、文章選択問題では2行にわたる長めの選択肢も珍しくないため、時間配分には注意が必要である。

各問題における設問のタイプは、①語句選択問題・空所補充問題（史料読解を求める問題も含む）、②考察力を要する文章選択問題（年代整序問題も含む）に大別され、大問ごとの難易差はほとんどない。そのほとんどが基礎・標準レベルと言ってよいが、やや細かい知識を問う問題も一部には含まれている。たとえば2月7日の問題IIは、教科書の脚注やコラムなどに目を通しておかなければ対処しにくい設問で構成されていた。ただ、その一方で、同日の問題Iは「標準」とはいえ「基礎」に近いレベルであったため、全体をならして見れば、日程ごとの難易差はほとんどないと言えるだろう。

近年では、共通テストと類似した形式の設問も見られるようになってきている。具体的には、①史料・表の読解を求める設問（2月7日の問題II－問8、2月8日の問題I－問13、2月9日の問題III－問4）、②地図・図を用いた設問（2月7日の問題II－問10、2月8日の問題I－問6）が挙げられる。地図・図を用いていなくても、たとえば「近江の天津は、琵琶湖の水上交通の要衝に位置した」といった選択肢文（2月8日の問題II－問7）のように、教科書に掲載されている地図を確認しておかないと対処しにくい内容も出題されている点に注意が必要だろう。

また、リード文には「羽仁もと子と近現代における女性の活躍」（2月7日の問題III）、「屏風に描かれた風俗と近世の芸能」（2月9日の問題II）など、興味深いものが見られた。こうしたテーマは受験生にとってそれほどなじみのあるものではないため、戸惑うこともあるかもしれない。しかし、どのようなテーマであっても、時代では原始から現代、分野では政治史・対外関係史・社会経済史・文化史のすべてを対象とし、全時代・全分野をカバーしようとする出題姿勢がうかがえる問題となっており、小問の難易度や形式がリード文に左右されることはない。したがって、

特定の時代・分野だけを集中的に学習しても効果は薄く、偏りのない学習をめざすべきである。

社会経済史には特に注意が必要である。たとえば、「石炭と近現代の産業・経済」（2月9日の問題III）では、多くが基本的な知識で対処できるものの、幕末から戦後にかけての、近現代の広い時期を漏れなく学習していなければ、高得点を望めない構成となっていた。社会経済史からの出題では、ほかにも「原始～中世の取引、経済活動」（2月7日の問題I）や「中世～近世の商業活動」（2月8日の問題II）が挙げられるが、過去にも「原始・古代の社会情勢や環境と生活様式」や「中・近世～近代の税制度と社会構造」をテーマとする問題が出題されていたため、過去問研究を充実させ、社会経済史に注目していた受験生は有利だったはずである。

対外関係史は、政治史とともに基本的な分野であるだけでなく、新たな履修科目として「歴史総合」が導入されたこともあって、今後ますます重要性を増すだろう。「近現代の日米関係」（2月8日の問題III）は、「歴史総合」で学習する情報と重なる部分が多かったため、「日本史探究」だけでなく「歴史総合」の教科書を熟読していれば、高得点が得られたのではないかと思われる。「12～19世紀の国際環境と対外関係」（2月7日の問題II）のような出題もあるため、前近代の対外関係についても注意が必要である。「世界のなかの日本」といった視点を意識しつつ、学習を進めるべきだろう。

## &lt;学習対策&gt;

【語句選択問題・空所補充問題への対策】まず、語句選択問題・空所補充問題については、基礎～標準レベルの問題がほとんどを占めているため、教科書の記述を精読し、理解できていれば十分合格点を得られるであろう。したがって、対策として最良の教材は教科書である。ただし、単純な暗記だけでは意味がない。特に空所補充問題は、問題文の流れのなかで正しい語句を判断する必要があるため、教科書の本文を読み進めていながら覚えていくことが大事である。教科書で学ぶ際は、たとえば荘園・金本位制など、やや難解なテーマに出会ったならば、常にその内容や仕組みをノートにメモするなどして、定着させていくことが大切である。個々の事件や政策について、因果関係を抑えつつ、背景・結果などをメモしたノートを作成するのもよいだろう。必要に応じてそのメモを参照しながら理解を深め、最終的にはメモを見なくても自分で説明ができるようになれば、入試問題に対応できるレベルでそのテーマが定着したと言えるだろう。このように、インプットした情報を常にアウトプットすることが大切である。

【文章選択問題への対策】次に、文章選択問題についてだが、ここで確実に得点できるかどうか合格へのカギとなるため、十分な対策が必要である。これらの問題については、選択肢文を短時間で的確に読み取ることを意識してほしい。文の正誤を判断する際には、どの時期や時代が問われているのか、どのような事象に関連する事柄が問われているのか、正文選択なのか誤文選択なのか、といった設問条件をしっかりと把握したうえで、選択肢文の論理性やひとつひとつの歴史用語の正誤、設定された時代と文の内容が合致しているか、などを判断する必要がある。こうした訓練を行うには、比較的入手しやすい、共通テストの日本史B、歴史総合・日本史探究の過去問に取り組んでみるとよい。文章選択問題においては、正解を見つけるだけでなく、誤文のどの点が誤りなのかをひとつひとつ確認していくことも肝要である。

【時事問題への関心をもつこと】また、時事問題が反映された問題文も見られることに注意した

い。日本史という科目の性格上、現在おこっている出来事がそのまま出題されることは考えにくい。ニュースで取り上げられるような諸問題は、過去のどのような歴史的な出来事と関連しているのかといった意識を常にもっていてほしい。歴史に関係の深いニュースにアンテナをはっておくということも、日本史の学習においては大切なことである。

【過去問での実践練習】入試直前には、実践練習による最終チェックを行ってほしい。過去問を入手し、実際に時間を計りながら本番のつもりで解答してみるとよい。間違えた箇所やよくわからなかった点については、もう一度教科書に戻って確認することである。こうした作業を繰り返し実践することで、必ず合格点を得られる実力が身につくはずである。

以上